

vol.101



Marouane Baslam

マロワン・バスラム

新潟大学 農学部
特任助教

Profile

モロッコ出身。2012年 スペイン ナバラ大学大学院科学研究科博士課程修了。PhD(生物環境学)。同大学研究員、スペイン国立研究協議会バイオテクノロジーセンター(CSIC-IdAB)研究員、新潟大学大学院自然科学研究科助教などを経て、16年より現職。17年よりEIG CONCERT-Japan日本側研究チームに参画。



Success is an Iceberg

—成功は冰山—

Q1. 研究テーマを選んだ理由は?

A1. 世界の食糧問題を解決したい

オリーブの茂る農園地域で生まれ、小さい頃から農業に興味を持っていました。両親とも大学教員で、日頃から科学技術や教育が家庭の話題でした。批判的思考と旺盛な好奇心はそのお陰かもしれません。特に植物は食料、医療、素材、エネルギーなどさまざまな産業の出発材料です。植物の研究で、世界の食糧問題を解決したいと考えようになりました。修士課程からスペインに渡り、ポスドクの時、共同研究で縁のあった新潟大学を紹介されて日本に来ました。米はアジアの重要な主食ですから、イネの研究も世



界の食糧生産の向上に大きく貢献すると考えたのです。

日本側チームのメンバーとして2つの国際共同研究に参画しています。1つは微生物が発する揮発性化合物を利用してイネやトマトの収量や品質を向上させる研究で、もう1つはイネやコムギなど穀物資源の利用を効率化する研究です。いずれも、気候変動に耐えて持続的な生産を確保し、世界の飢餓をゼロにすることを目指しています。

Q2. 研究者としての心構えは?

A2. 諦めず地道に努力を

成功は冰山のようなものです。論文など人の目に触れる成果はほんの一部で、水面下には忍耐と勤勉、膨大な仕事の蓄積があります。考え抜いて、人と対話し、時には失敗もして、地道な努力を積み重ねることが、成功の全容なのだと思います。チャンスはすぐに訪れるとは限りませんから、諦めないことです。

国際共同研究は時差や言語、さまざまな違いを乗り越える必要があります。進行が遅いので、覚悟が必要です。シンプルで現実的な目標を持ち、広い視野で人と交流して理解を深めてほしいと思います。科学の発展は国境

を越えた研究者間の議論にかかっています。

Q3. 日本での暮らしは?

A3. 自然や温泉でリフレッシュ

普段は健康のために野菜たっぷりの食事を楽しみ、夜はジムで運動しています。休日は海や山に出かけるのが好きで、旅先で出会う新しい景色や体験が次の仕事の活力になります。来日した研究者と連れだって温泉へ行ったこともありますし、仲間と稲刈りもしました。新品種の「コシヒカリ新潟大学NU1号」はとてもおいしいですよ。

日本人の勤勉で協調的な働き方が自分に合っているので、任期なしの在職権を得て日本に定住したいです。研究室での学術研究をもとに、将来は起業も可能性として考えており、ビジネスや金融も勉強しています。

究極の目標はノーベル賞です。野心を持って、これからも粘り強く取り組んでいきます。



JSTは、シンクタンク機能、研究開発、産学連携、次世代人材育成、科学と社会との対話など、多岐にわたる事業を通じて、持続可能な開発目標(SDGs)の達成に積極的に貢献していきます。



編集長：安孫子満広
科学技術振興機構(JST)広報課
制作：株式会社伝創社
印刷・製本：株式会社丸井工文社



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。



古紙パルプ配合率70%再生紙を使用

JST news

March 2021

発行日/令和3年3月3日

編集発行/国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)総務部広報課

〒102-8666 東京都千代田区四番町5-3サイエンスプラザ

電話/03-5214-8404 FAX/03-5214-8432

E-mail/jstnews@jst.go.jp JSTnews/https://www.jst.go.jp/pr/jst-news/



最新号・バックナンバー